2002年9月30日発行
1960年7月15日創刊

この<たより>の中の文章は、すべて自由に転載・引用していただいてけっこうです。ただ、その転載または引用された印刷物を一部、当会に送ってください。

98

【戦争はまっぴら御免だ】
小林トミ/飯岡祐保/細田伸昭/柴谷正博/伊藤幹彦/堀　孝彦
◆鶴見俊輔/野添憲治/福田有広

二度と戦争をおこさないために

小林トミ

四月一日の朝、池袋の勤労福祉会館に六月十五日の会場の申し込みにゆき、希望の部屋がとれてほっとした。考えてみると、六〇年安保から四十二年目になる。その間、政治のあり方に関心を持ちつづけたが、小泉内閣になってから、有事法制、メディア規制法、住基ネット導入など、戦争への道を歩んでいるので不安になる。何とか、戦争への流れをせきとめなければならないと思っていた。そんな時、吉川勇一さんと福留節男さんから、六月一日（土）の午後、宮下公園に集まり、有事法制について市民が勝手に反対の声をあげようという葉書をいただいた。私は早速、六・一五の集会と、六月一日のデモの知らせを発送した。

六月一日、渋谷は人であふれていた。宮下公園にいくと、青いテントがならんでいる。今の政府はどうしていつも弱い立場の人たちに冷たいのだろう。戦争のときも、弱い立場の人が戦争になると、空襲や食糧難でひどいめにあった。

集まった人びとのなかに、声なき声の人たちの顔をみて、私も参加できてよかったと思う。それに九十九里町から金井佳子さんも参加され、心強く思った。

デモは日本山妙法寺の僧侶による太鼓の音を背に渋谷の街を一巡する。

今の若い政治家は戦争体験がなく、口先ばかりで有事法制の重要さを強調するが、私は有事法制は市民にとって非常に危険だと思う。今、反対の声をあげなければ、恐ろしい戦争の時代がくるのだから心配になる。

私は戦争中、空襲の下を逃げまわった経験からベトナム戦争も、湾岸戦争も、アフガン戦争のときも、いつも空襲でいためつけられる人びとの立場にたって抗議のデモの中にいた。

一九四五年三月十日、東京大空襲では学校の先生や隣の席にいた友だちがなくなった。私の家は焼けなかったが、B29が焼夷弾を落として、家の中は昼間のように明るく、東京の空はいつまでも燃えていた。

朝早く学校まで歩いていくと、黒い油によごれた人がバケツ一つ